

香川県埋蔵文化財センター考古学講座

令和元年度 第1回

香川の大家墓所 2

—松平編—

令和元年7月6日(土)10:00~12:00

古野徳久
(香川県埋蔵文化財センター 調査課)

1

はじめに

- 平成31年2月26日「高松藩主松平家墓所」史跡指定
- 法然寺墓所(高松市仏生山町)及び日内山墓所(さぬき市造田、霊芝寺)で構成
- 全国で27件目の大家墓所指定(四国では、徳島藩主蜂須賀家墓所(徳島市)、土佐藩主山内家墓所(高知市)に続き3件目。丸亀藩主京極家清滝(せいりゅう)寺墓所も指定(滋賀県米原市))
- 大家墓所調査 1950年代徳川将軍家、60年代岡山藩主池田家、70年代仙台藩伊達家等
- 文化庁 全国の大家墓所をそれぞれに特色を持つ地域の代表的な文化財の一ジャンルとして保存。国庫補助による調査と史跡指定

2

高松松平家墓所の調査

- 平成23~26年度に香川県立ミュージアムが実施
- 平成27年3月に報告書『高松藩主松平家墓所調査報告書』刊行
- 平成27年谷中霊園から移転完了
- 平成28年3月に「東京都谷中霊園高松松平家墓所調査報告」『香川県立ミュージアム調査研究報告』第7号収録

3

本日の筋立て

- 法然寺の成立—松平頼重の入封と法然寺、一族墓所の造営—
- 法然寺境内の構成—西方極楽浄土の立体再現—
- 法然寺墓所—一族墓所の変遷—
- 霊芝寺墓所—水戸徳川家とのきずな—
- 松平家の墓所変遷—県外のその他の墓所—
- 谷中霊園墓所—明治時代以降の高松松平家墓所—
- 明治時代以降の法然寺墓所

4





3 法然寺墓所——族墓所の変遷——

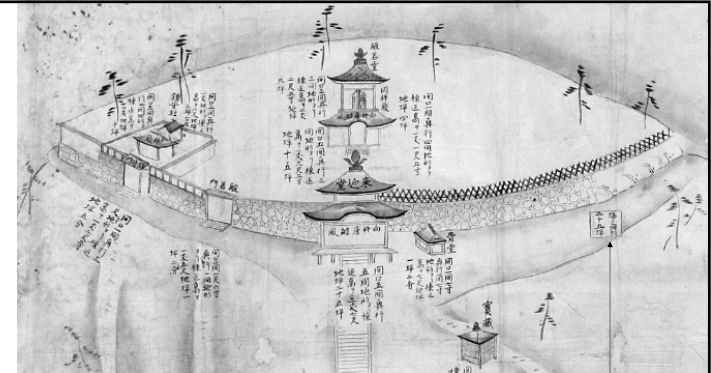
- 正式名称「般若台」(悟りを得る智慧)
- 高松松平家最大の墓所
- 約200基の一族墓
- 中心となるのは初代藩主頼重墓
- 約200基のほとんどは「無縫塔(むほうとう)」と呼ばれる形
- 幕末まで墓の築造が続き、廃藩置県による松平家の東京移住後も藩主の参り墓が建てられるなど、菩提寺としてあり続け、現在に至る



無縫塔
寺の僧侶の墓として使われる場合が多い。
通常は卵形の下が蓮花(うけはな、蓮)である。

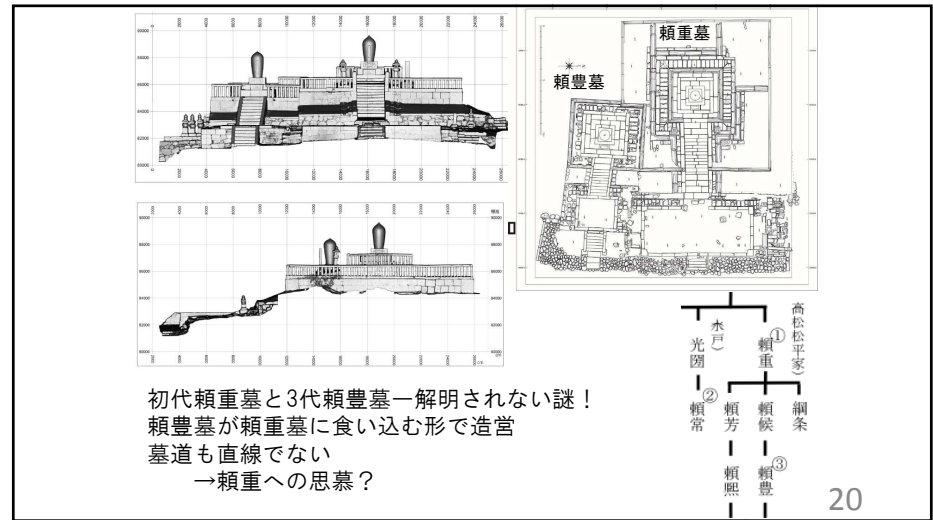
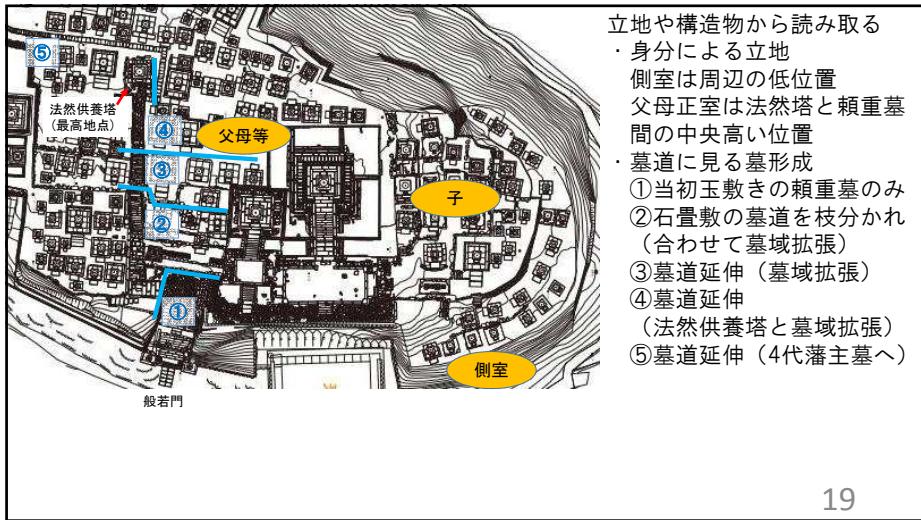
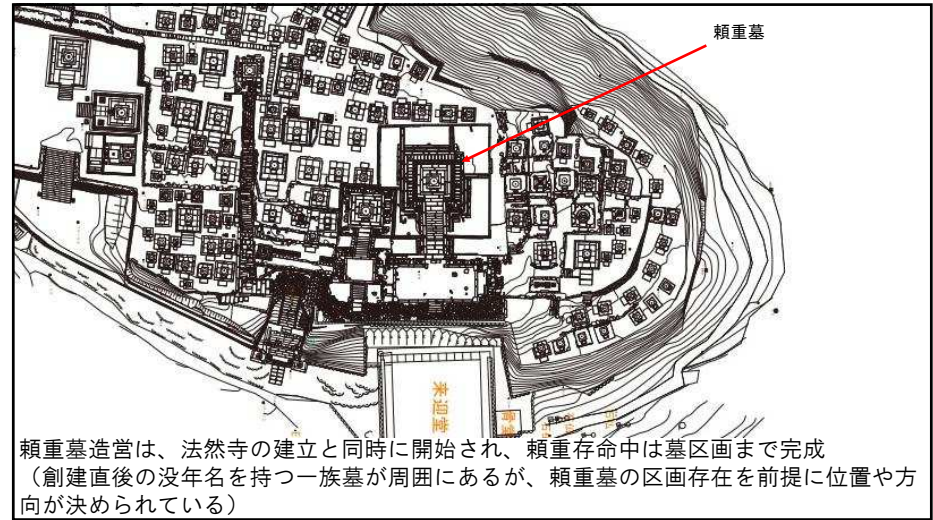


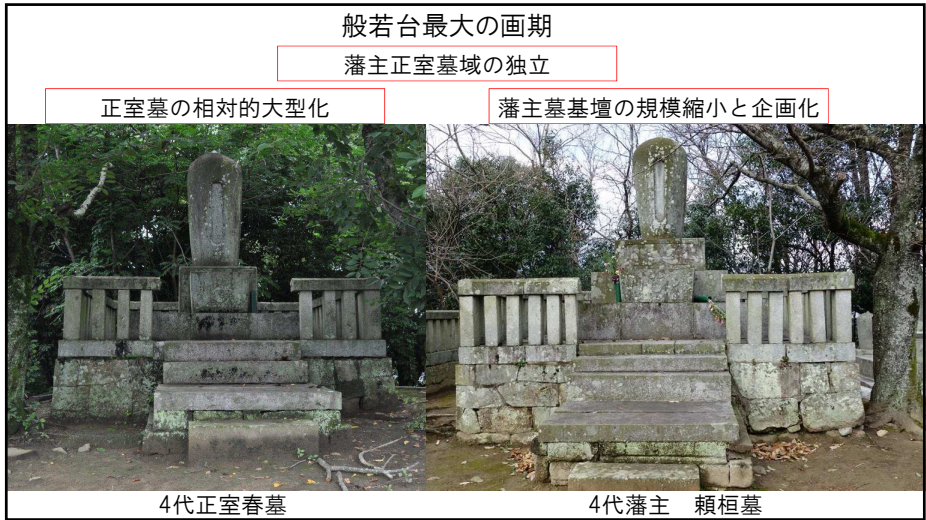
造営当初の
法然寺墓所



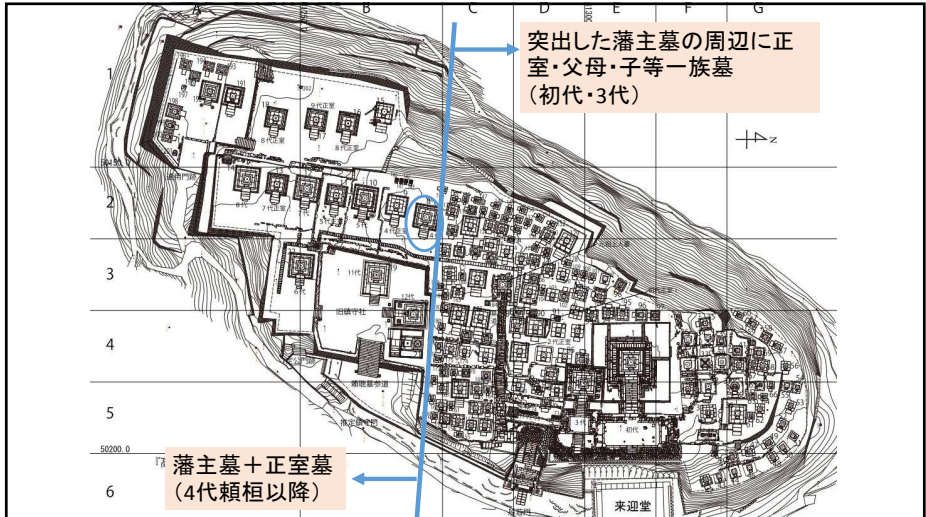
「法然寺旧境内御朱印附属絵図面」(般若台部分)
(最古の法然寺絵図だが、制作時期・目的不明)
頼重墓と鎮守社のみ描かれる
2層建て檜皮葺宝形造。般若堂内に頼重像を安置

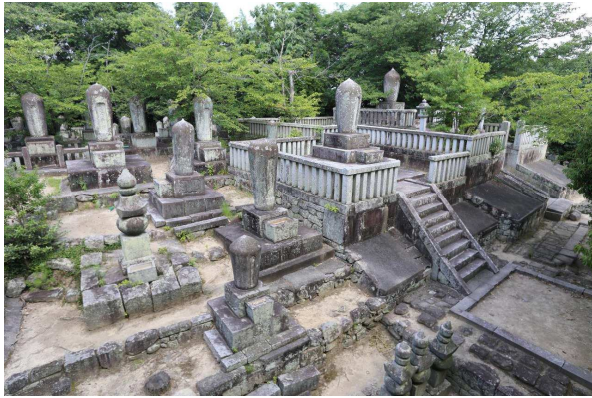
五重塔予定地





- ・「(前略) (懐公) 御逝去の時御葬一件至て御粗略委細に承及し事あれども略すにして御墓の覆拝殿も無之、雨晒にて御連枝方と同様にて在之しに、遥の後春光院様惠公の御女と有之に依て御墓に御鞆覆出来に付、懐公御墓其儘に難捨置御同様に覆、懸りしと云々、(鎌田本頭書)「証今も拜見せよ、惠公の御墓と懐公の御墓とは雲泥の違也」「増補穆公遺事」
- ・連枝には覆い(霊廟)を建てないのがルール
- ・(頼桓は2代弟の孫。養子として藩主。在位4年、19歳で没。次期藩主頼恭は水戸徳川家一族より養子)
- ・藩主だが連枝という微妙な立場が墓の位置・外形に反映？
- ・正室春墓には霊廟 → 均衡を図るため、頼桓墓に廟堂を後付け
- ・基壇が付く、藩主墓と並列 ← 3代藩主の娘
- ・5代藩主頼恭墓は墓規格の前例踏襲、4代正室墓の横に造営
- ・5代正室八代墓は墓規格の前例踏襲、5代藩主墓の横に造営
- ・➡藩主・正室墓域の成立、一族墓との分離。幕末まで継続





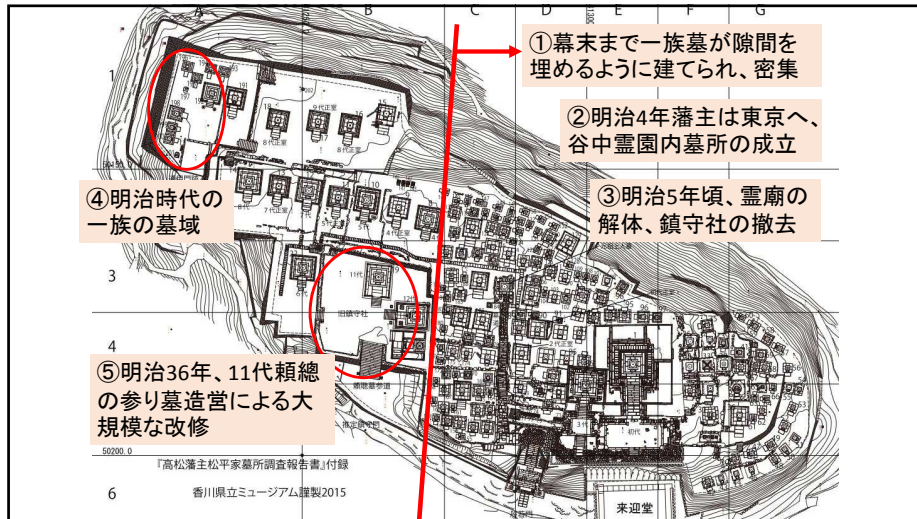
突出した藩主墓の周辺に正室・父母・子等一族墓

25



藩主墓+正室墓域

26

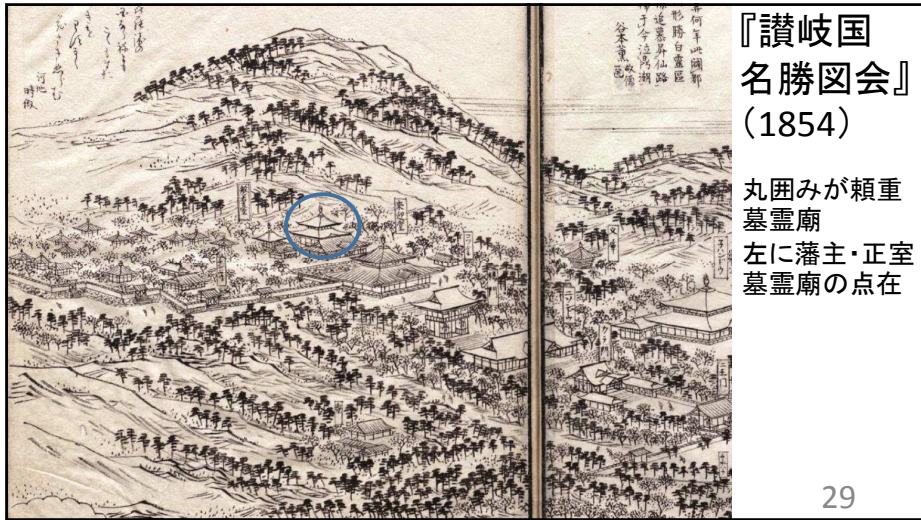


霊廟の復元

『讃岐国名勝図会』で藩主・正室墓に霊廟
埋蔵文化財、文献、建造物による総合調査成果

- ①埋蔵文化財：6代頼真墓前の発掘
拝殿跡痕跡を発見
- ②文献：般若台の歴代藩主墓の配置平面図
「増補穆公遺事」
「法然寺旧境内御朱印附属絵図面」
- ③建造物：松平家一族の現存唯一の霊廟の図面作成

28



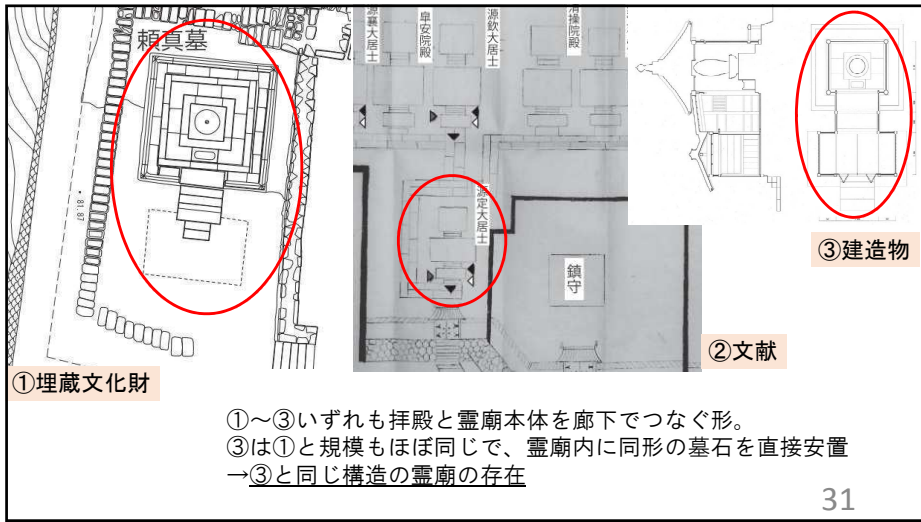
『讃岐国
名勝図会』
(1854)

丸囲みが頼重
墓霊廟
左に藩主・正室
墓霊廟の点在



埋蔵文化財
調査

6代藩主 頼真
墓前 発掘調査



①埋蔵文化財

①～③いずれも拝殿と霊廟本体を廊下でつなぐ形。
③は①と規模もほぼ同じで、霊廟内に同形の墓石を直接安置
→③と同じ構造の霊廟の存在



松平頼該(よしかね)
(金岳、左近)
墓霊廟

・高松市本堯寺(法華宗)に子や側室と小さな墓所を営む
・10代藩主の兄で、慶応4年(明治元年)死去
・高松藩が明治維新を乗り切るため、藩の中心として活躍
・法華宗を篤く信仰したため、法然寺に葬られなかった?
・藩主墓所以外のため、解体を免れたか?



墓構造に見る階層差

- ・約200基の墓のうち、9割が一族墓
- ・無縫塔形の墓塔+蓮華を浮彫にする台座が、藩主～一族に共通
- ・谷中霊園内墓所の一族墓や般若台周辺の重臣墓も同形



「無縫塔」の林立
→ 一族の結びつき

①藩主墓



4代藩主 頼桓墓

最も大きく、墓塔下の台石の数も多い。また基壇を持ち、霊廟で覆う
墓石規模は3代墓で確立
基壇規模は4代墓で確立(縮小化による相対的な地位の低下)、以降定型化

②藩主墓



藩主墓より全体にやや小さく、墓塔下の台石も1段少ない
基壇を持ち、霊廟で覆う
4代正室墓以降、定型化

37

③藩主生母・
有力一族等



基壇を持たない
霊廟がなくなり、代わりに門扉がつく
初代・2代正室墓はこの形 → 4代正室墓から②型へ格上げ

38

④その他
一族墓



形態細分が可能だが、性差や地位、時代との相関関係が認められない
墓塔の高さも大小差があるが、結果は同様
墓所に近接する重臣墓と④型との違いも不明

39

4 霊芝寺墓所－水戸徳川家とのきずな－

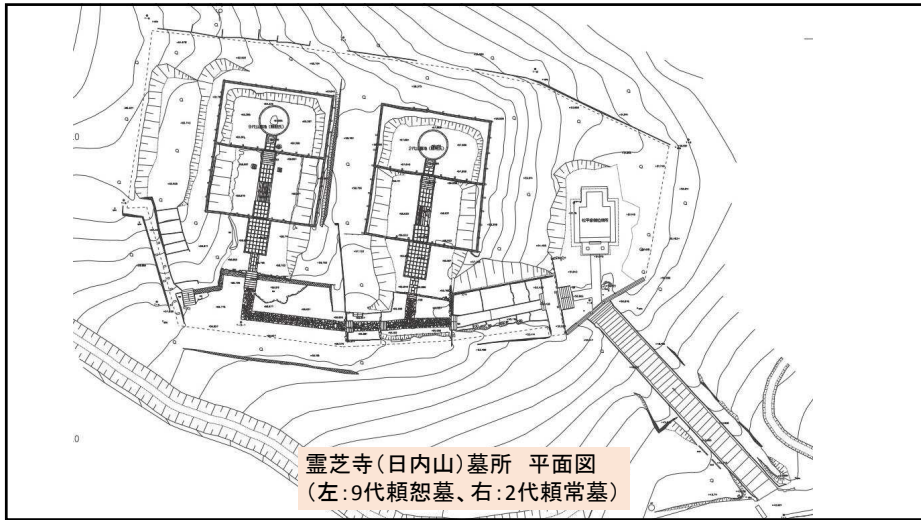
- 法然寺より15km東方のさぬき市の山間に所在
- 霊芝寺は松平家ゆかりの寺院だが菩提所とされず、儒式の墓所は「日内山」(水戸徳川家は瑞龍山)と呼ばれる。
- 選地理由は明らかでないが、墓所を山が取り巻く環境は瑞龍山に似る
- 2代頼常が自ら命じて、没後の宝永元年(1704)に新たな藩主墓所を開かせた。
- 頼常は水戸徳川家世子からの養嗣子、出自の葬制を継承
- もう一人の埋葬者の9代頼恕も水戸徳川家出身

40



- 石鎚山から東に尾根が3つ伸びる。中の南北の尾根に挟まれた尾根上に墓所は立地。
- 3方は山に囲まれ、東にのみ開くが、霊芝寺が視野を遮る(選地に霊芝寺を考慮?)。

41



霊芝寺(日内山)墓所 平面図
(左:9代頼恕墓、右:2代頼常墓)



2代頼常墓

43

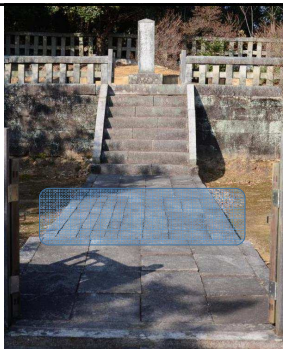


2代頼常墓 現状

44

文献調査との照合

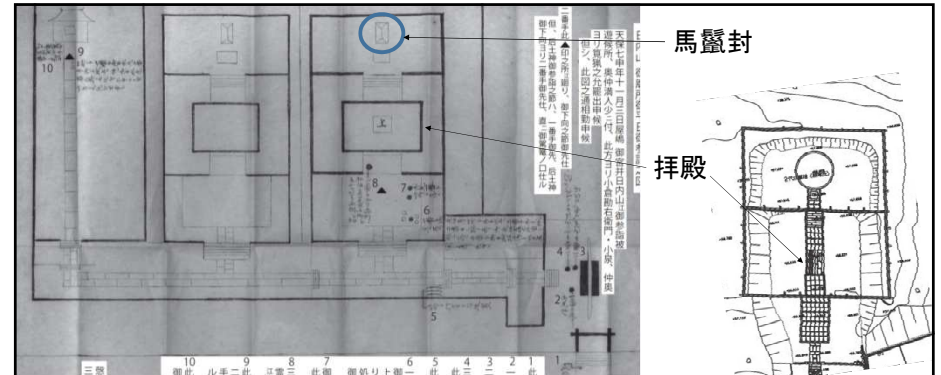
- ①明治5年、法然寺霊廟と同時期に、拝殿が撤去された。
- ②墓の現状は土饅頭型だが、本来は馬鬣封（ばりょうふう）。



①青部のみ石の並びが異なる。施設の可能性

②男子は馬鬣封（左）。女子は円錐形（右）

『徳川ミュージアムのブログ』
<https://ameblo.jp/tokugawamuseum/entry-11632835336.html>



日内山御廟所御平日御参詣之図
 (弘化3年、1846)

水戸徳川家墓所(茨城県常陸太田市)との比較

- ・馬鬣封は水戸徳川家の男子墓の形
- ・墓石の形、正室墓を伴わない点は一族墓の姿
- ・墓域の広さは一族墓をはるかに越える

➡水戸徳川家の分家としての意識

但し他の一族と異なり、
 水戸徳川家嫡流、大藩の藩主墓として
 格式を保つ



5 松平家の墓所変遷—県外のその他の墓所—

- ・江戸 瑞臨寺（3代藩主正室）、本門寺（6代藩主正室）
 いずれも信仰上宗派が異なるため法然寺が避けられた？
 伝通院（10代藩主・正室）
 正室は将軍家斉の娘。頼胤が藩主となる前に死去。
 江戸在住だったため、兄弟が多く葬られる伝通院が選ばれたか？
 頼胤は死去の明治11年には讃岐を離れ、江戸に墓所も構えていなかったため、正室の隣に葬られたと推測)
- ・藩主・正室21人（最後の藩主夫妻を除く）中、17人が讃岐
 → 支配地に墓を営む



図5 小石川伝通院(東京都文京区)松平頼胤・靈鏡院墓
写真左 松平頼胤墓正面、写真右上 墓所全景正面、
写真右下 墓所全景左前

伝通院
墓形は無縫塔
でない
正室墓は伝通
院の他の墓塔
に倣う？
頼胤墓は無墓
祈時代を反
映？

6 谷中霊園墓所—明治時代以降の高松松平家墓所—

- 調査の経緯
- 香川県内での高松松平家墓所調査事業中、谷中霊園再生事業による法然寺移転計画が進捗
- 調査成果をより豊かにするため、松平家の許可を得て、移転作業に立ち会う
- 第11代藩主・正室、一族墓2基の解体、棺取り上げ
- 県立ミュージアムと台東区教育委員会と共同調査
- 大名墓の地下埋葬構造研究に大きな成果



現地案内板

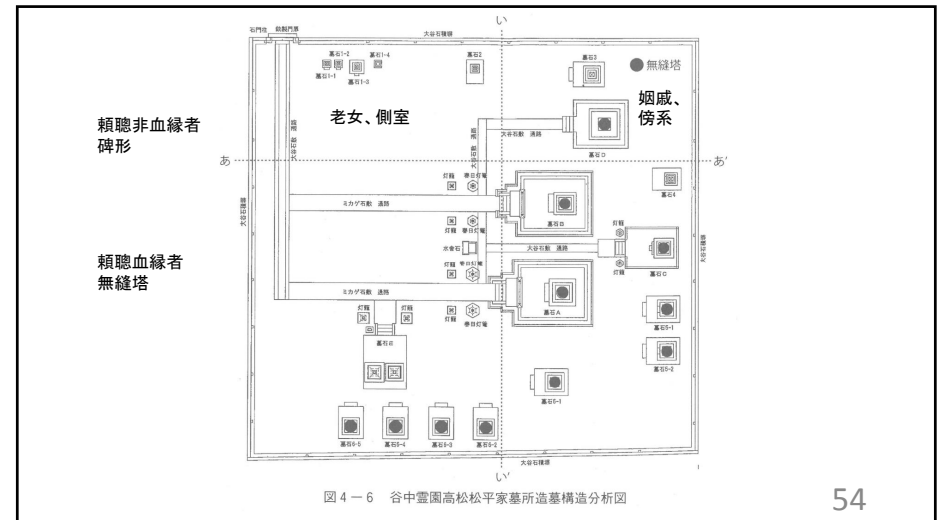
谷中霊園墓所の形成

- 明治4年 廃藩置県に伴い、東京移住。高松の菩提寺廃止
- 明治7年 「墓地取扱規則」(朱引内(江戸の府内)にある従前の墓地で今後の埋葬を禁じ、9カ所の定められた墓地に埋葬する)
- 明治11年 頼胤死去
- 明治12年 頼聰 墓所の払下げ願い(娘の死没契機)
- **新たな一族墓所の形成**
- 明治16年 墓所拡大(計420坪)
- 昭和19年 12代当主頼壽墓(傘塔婆型墓、夫婦同一基壇)
- 松平家の墓所形成に幕
- 13代当主頼明 法然寺に代々墓

谷中霊園墓所の構造

- 合計21基
- 11代当主頼聰と正室墓を中心 般若台造営の頼重と対照
- 般若台同様、墓石規模・構造、区画分けにより、階層差を示す
- 基壇の有無
- 写真A B D
- C

53



54

当主・正室墓



頼聰墓

頼聰正室墓

頼壽墓・正室墓

無縫塔形
基壇は法然寺墓所藩主墓と同規模
同形並置及び正室墓が小さめに作られる点は法然寺墓所と同じ
霊廟の代わりに門扉
➡法然寺墓所の継承

傘塔婆形
頼壽墓・正室墓は頼壽墓基壇上で、
墓石をずらして正室墓を建てる
➡高松平家墓所形成の歴史の
終わり

55

世子正室等墓



頼温墓

謳子墓

頼温は一時世子。謳子は早世した世子正室。
法然寺墓所では4つのうち3番目の階層
藩主・正室墓と同じ基壇規模
門扉がない
石材や造りに差異化

56

一族等墓

無縫塔形



法然寺墓所では最も下の階層
基壇がない
墓石規模が小さい
更に細かい差異化(塔形、基台、水盤)

碑形



当主女だが傍系



側室・世子生母



老女

大名墓下部構造の解明

- 学術調査や土地区画整理事業による移転等で調査実施
- 将軍家や伊達家、池田家等行われてきているが、契機が少なく、回数は稀
- 後裔家の意向で公開されないのが一般的
- 他の高松松平家墓所では、未調査
- 明治時代の葬制は江戸時代を継承している可能性大
- 江戸時代から昭和までの大名家墓所の埋葬施設下部構造が判明する例は極めてまれ

58

謳子墓 明治28(1895)

- 基壇内は石詰め
- 深さ3.1mで石室蓋検出(上に墓誌)
- 内部の棺(伸展葬)・遺体は腐敗消滅
- 棺台に厚さ10cmの石灰
- 棺と石室の隙間には炭充填
- 副葬品なし



写真33 墓石D(松平謳子墓)石室蓋検出



写真35 墓石D(松平謳子墓)石灰棺台



写真36 墓石D(松平謳子墓)石室床

※白黒写真は後日移転工事写真を拝見したもの

頼聰墓 明治36(1903)

- 基壇を撤去すると、内部は石ブロック積み(墓石沈下防止)
- 埋土に石屑多量(墓石加工仕上げの屑を埋める)
- 深さ3.5mで石室蓋検出(上に墓誌)
- 内部の木棺(伸展葬)は腐敗消滅
- 副葬品なし
- 北枕



写真9 墓石A(松平頼聰墓)墓石A蓋ブロック



写真11 墓石A(松平頼聰墓)蓋誌石體検出



※白黒写真は後日移転工事写真を拝見したもの

60

頼温墓

大正10(1921)

- ・基壇を撤去すると、内部は石ブロック積み
- ・地下に石室。蓋上に天児人形の櫃
- ・内部の棺(伸展葬)・遺体は遺存
- ・木棺内にブリキ棺を入れ、更にその中に木棺を入れる
- ・副葬品は英字図書、謄本、煎茶道具等



写真25 墓石C(松平頼温墓)墓石基礎構造物



写真26 墓石C(松平頼温墓)棺底

※白黒写真は後日移転工事写真を拝見したもの

千代子墓

昭和2(1927)

- ・基壇を撤去すると、内部は鉄筋コンクリ基礎構造
- ・深さ3.1mで石室蓋検出(上に墓誌)
- ・内部の棺(伸展葬)・遺体は遺存
- ・木棺内に銅棺を入れ、更にその中に木棺を入れる
- ・副葬品は念仏袋



写真17 墓石B(松平千代子墓)墓石基礎構造物



写真18 墓石B(松平千代子墓)外木棺



※白黒写真は後日移転工事写真を拝見したもの

62

頼壽墓

昭和19(1944)

- ・基壇内の構造不明
- ・深さ3mで石室蓋検出
- ・内部の棺(伸展葬)・遺体は遺存
- ・棺台に厚さ10cmの石灰
- ・木棺内にブリキ棺を入れ、紙で内貼りをし、棺とする
- ・副葬品は日用品、小品盆栽、書籍、念仏袋等



写真41 墓石E(松平頼壽墓)木棺



写真42 墓石E(松平頼壽墓)木棺開棺



写真43 墓石E(松平頼壽墓)ブリキ棺

※白黒写真は後日移転工事写真を拝見したもの

高松松平家墓所の連続性

- ・谷中霊園墓所造営の契機となった子女の墓はいずれも無縫塔
- ・墓上部構造は法然寺墓所からの継承
- ・墓下部構造は既知の大名墓例と同じ石室木炭石灰槨墓
- ・墓下部構造も法然寺墓所からの継承
- ・伸展葬は明治時代以降の西洋の葬制の影響

64

埋葬施設の変遷

- A類: 石室床に薄く炭を敷き、石灰で棺台を作り、上に木棺。周囲に炭を充填(謳子墓・頼聰墓)
 - B類: 石室内壁に化粧土。石の棺台。木→金属→木の3重構造の棺。周囲に炭を充填(頼温墓・千代子墓)
 - C類: 石室内に金属→木の2重構造の棺。周囲・上に石灰を充填(頼壽墓)
- A類→B類→C類と変遷
 - A類でも頼聰墓は元藩主にふさわしい厚葬(2重構造の木棺・間にも石灰)
 - B類は鍋島建子(元藩主室)墓に類例。明治時代の流行?
 - C類は棺は簡略化されながら、石灰が木棺を包み込む点で当主墓?

65

7 明治時代以降の法然寺墓所

- 明治当初
 - 高松に留まった一族や一門の松平大膳家が法然寺墓所の南端に墓域を営む
 - 大膳家は位牌型で、碑銘に法号なし(廃仏毀釈の影響?)
- 明治37年に画期
 - 頼聰詣り墓の築造(遺志による)
 - 鎮守社跡地を墓域として大改修し、藩主墓の規格を継承した墓
 - 一族等の墓域形成は終わり、再び高松松平家の墓所に

66

7 明治時代以降の法然寺墓所

昭和19年

- 頼壽詣り墓の築造(頼聰にならい、当主としての墓所継承)
- 当初玉石貼りの土饅頭型(時代的な要請?、慶喜墓の模倣?)

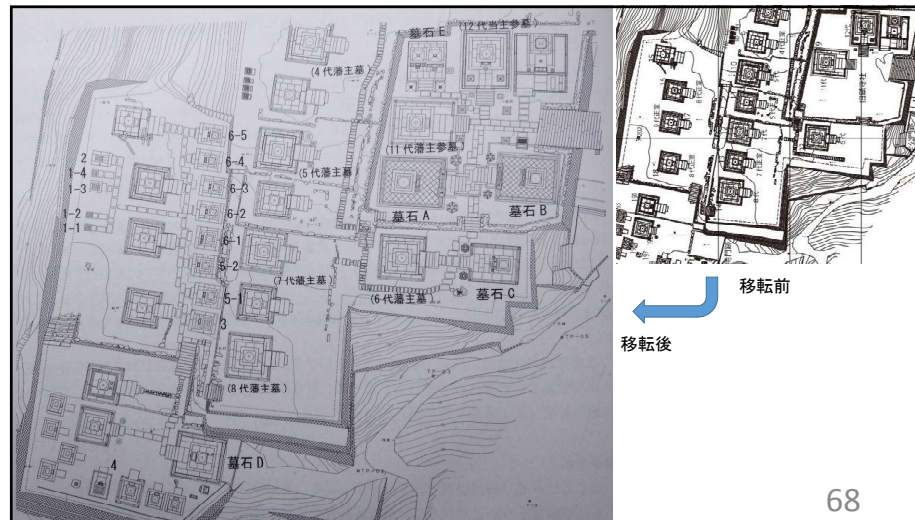
昭和51年

- 頼壽墓を、33回忌を期して現在の無縫塔型に建替え?
- 改めて、330年にわたる高松松平家の葬制の継承

平成27年

- 谷中霊園墓所の法然寺墓所への移転、統合
- 高松松平家墓所形成の終わり

67



68

ご清聴ありがとうございました。